

## 第43回世界クロスカントリー選手権大会帯同報告

加藤 穰

日本陸上競技連盟医事委員

### 1. はじめに

2019年3月30日に開催された第43回世界クロスカントリー選手権大会に帯同した。本大会は1973年に第1回を開催以降、毎年開催されていたが、2011年より隔年開催となっている。今回はデンマークの第2都市であるオーフスのモースゴー先史博物館にて開催された。派遣選手は本大会に先立って行われた日本陸上競技選手権大会クロスカントリー競走（通称福岡クロカン）の上位者より選出された。

IAAFのセバスチャン・コー会長によれば、今後クロスカントリー大会を発展させることを望んでおり、同種目については今後オリンピック競技にあげることも検討しているとのことであった。

### 2. 選手団の構成

河野匡強化委員会会長距離・マラソンディレクターをヘッドコーチとし、コーチ5名、医師1名、トレーナー2名、渉外1名、選手22名（男子12名、女子10名）の計32名の選手団であった。横川浩 JAAF 会長も渡丁され、大会前には選手団への激励もして頂いた。

### 3. 派遣前準備

派遣選手決定後に、派遣文書とともにメディカルアンケートを送付した。メディカルアンケートによる回答は全員から得られた。シニア2名で生薬を含む医薬品の使用が認められたほか、ジュニア1名でメチルエフェドリンを含む感冒薬（花粉症薬として使用）の使用が認められたため、注意喚起を行った。その他、花粉症薬の継続を希望するものが数名いたが、ステロイドを内服しているものはいなかった。

大会事務局よりEU圏内にもちこまれる薬についての制限が規定される旨のアナウンスがあり、違法

薬や多幸化薬、ドーピング指定対象薬については持ち込みが禁止されるほか、それ以外の薬についても使用用途を明らかにする必要があるとのことであった。そのため、救護バックに入れる医薬品を必要最小限度のものに限定し、それぞれについて使用用途ごとに携行薬証明書をつけるかたちで現地入りした。それなりに手間のかかる作業であったが、入国後本書式を事務局スタッフより照会されるようなことはなく、結局は一般的な注意事項の案内であったものと思われる。

### 4. 渡航および現地の状況

成田発パリ経由でビルン空港に到着した。その後も1時間程度のバスの移動があり、現地ホテルまでの所要時間は20時間程度を要した。気候は日本というところの初春といったところで、気温は10℃弱であったが、海沿いの街で風が強く、体感的にはそれ以下に感じた。天候によるところも大きく、大会にむけて徐々に気温は上昇し、大会当日はむしろ暖かさを感じるくらいであった。ホテルはオーフス駅近くにあり、飲料水などを購入するマーケットも徒歩圏内であった。練習場所も公園が南北それぞれ約2-3km離れたところにあり、走っていくにはちょうどよい場所であったと思われる。食事はビュッフェ形式で、衛生的で肉も野菜も多く、特に栄養面で困るようなことはなかったが、選手の中には試合前に持参のご飯を食べていたものもいた。

### 5. 現地の医療活動

大会会場は博物館周回コースとなっていた（図1）が、博物館自体が傾斜地に建てられており（図2）、その片屋根がその傾斜地に沿った形となっているが、その屋根もまたコースの一部になっているというかなり奇抜なコースであった。試走に参加し

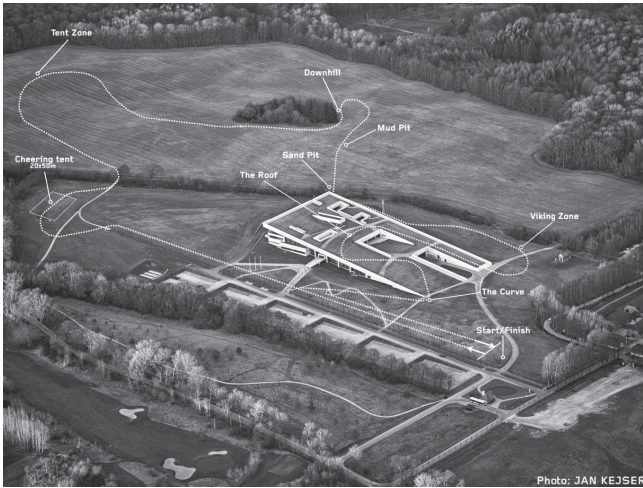


図1. コース概略図. スタートから長い登りがあり、ほぼ平坦のないコースを走る。途中で水場と泥沼による不整地がある。

たコーチ曰く、この屋根の勾配は「箱根の遊行寺の坂より急」とのことであり、同区間がコースの急所となることが想定された。それ以外にもアップダウンが著しく平坦な箇所がない、3000mSCのような水場がある、泥でずぶずぶになった不整地区間があるなど、日本でみられるクロスカンントリー大会とは一線を画しており、まさにエクストリームレースというような様相を呈していた。

大会自体はアフリカ勢優勢で進行し、特にシニア男子はほぼ坂道のコースにもかかわらず、1kmあたり3分をきるレベルで走っており、実力の違いを実感させる内容であった。

大会会場とは徒歩で数分程度の場所にテントスペースがあり、選手団はそちらで待機した。試合前のウェイティングスペースはスタート地点に隣接されていたが、そちらは選手以外は入れない設定となっていた。救護所はコースを挟んだ対極側に位置しており、観客もいたりして導線が悪く、試合後気分のすぐれない選手はゴール後選手団の待機しているテントスペースに運ぶ方が速かった。女子で2名ゴール後に倒れこんだが、テントで休息しているうちに回復した。外傷は軽症1名で、創洗浄・保護で対応可能であった。

## 6. ドーピングコントロール

競技会前検査で女子1名が血液検査の対象となった。競技会検査の対象となったものはいなかった。



図2. モースゴー先史博物館の屋根もコースの一部であるが、ここが一番の傾斜地となっている。

## 7. まとめ、反省

派遣前より足を痛めたジュニア男子が1名おり、筋性の痛みではないことが想定され、試合の出場を断念した。事前アンケートでも故障の報告はなく、本件についてはメディカルチームで対応することが困難であった。選手本人もまだ若いということと、進路に関係するためどうしても試合に出たいという意思が強かったのだろうと推察されるが、もう少し事前のコミュニケーションが必要であったと反省している。

今回は大会事務局より持ち込み薬剤の制限に関するアナウンスがあり、持ち込む薬剤の種類や量をかなり制限したが、結果として本事項が遠征中に話題になることはなかった。薬を制限した結果、バッグは一つで足りたが、短期間の遠征であればこれくらいの機材の方が輸送の負担は少ないという印象であった。もちろん、傷病者が多く出てきた場合はこの限りではないが、帯同する大会によっては薬品リストについて再考の余地があると考えられた。